

令和7年度仙台市いじめ防止等対策検証会議 学校教職員ヒアリング概要

1 実施状況

- ・ 11月 4日 (火) 仙台市立四郎丸小学校 出席者： 本団副会長、村松委員
- ・ 11月 5日 (水) 仙台市立七郷小学校 出席者： 氏家会長、村松委員
- ・ 11月 6日 (木) 仙台市立第二中学校 出席者： 氏家会長、大曾根委員
- ・ 11月11日 (火) 仙台市立郡山中学校 出席者： 本団副会長、大曾根委員

2 ヒアリング内容

【こどもからのSOSを受信しやすい環境づくり】

	内 容	委員所感
学校生活アンケート等の活用	<p>○本校では、「心の健康観察」や「学校生活アンケート」により、即時担任が声を掛け、児童の友人関係の悩みやトラブルを積極的に把握できるようになった。また、組織で対応・支援しているので、相談できる相手が増え、児童・保護者共に思いをしっかりと伝えてくれるようになった。</p> <p>○本校では、6月と11月に学校生活アンケートを実施し、こどもたちの困りごと等を簡単に書ける形式にしている。その結果を基に年2回の個人面談を行っている。アンケート後の聞き取りで過去の出来事をこどもが話した場合は、「今度何かあったらすぐ言ってね」と伝える。過去を掘り返すより、今後の対応を重視し、どんな小さなことでもすぐ知られるよう促すことを大切にしている。</p> <p>○本校では、5月、8月、1月の年3回、学校生活アンケートを実施し、いじめを含めた友人関係等の悩みや困りごとがないかを定期的にスクリーニングし、早期発見・早期対応につなげている。いじめがあったかという質問で「はい」に丸をつけた後に消して「いいえ」にしている場合でも、必ず本人に話を聞くようにしている。</p> <p>○本校では、こどものSOSを把握するために学校生活アンケートを実施している。学校生活での不安や悩みがあるか、いじめを受けたことがあるか、そのいじめは続いているかという構成になっている。勉強や家庭の悩みなどを書くこどもが多い。</p>	<p>○「心の健康観察」は市内で新たな取組として注目されているが、先生方にとって、負担感を与えるものではない。むしろ、日常の中で計画的にこどもを育てているという教育こそ本当に大切だと考える。（本団副会長）</p> <p>○手間はかかるても、学校生活アンケート後に行う個人面談でのやり取りの重要性を実感している。（氏家会長）</p> <p>○学校生活アンケートと個人面談は時期を工夫し、こどもの本音を引き出して担任との距離を縮めている。児童支援教諭は学校独自アンケートやいじめ対策支援員を活用しており、適任者の配置が重要である。（村松委員）</p> <p>○学校生活アンケートを1年間で複数回実施することは、生徒の小さな変化を見逃さないという強い意思の表れであり、学校が常に話を聞く姿勢を示すメッセージにもなる。定期的な問い合わせは相談のきっかけとなり、いじめの未然防止に機能している。（大曾根委員）</p>

	内 容	委員所感
学校生活アンケート等の活用	<p>○定期的な学校生活アンケートに基づくこどもへの聞き取りでは、時間が経ってから過去の出来事を話すことがあり、対応が難しい場合もある。</p> <p>○市全体で行うアンケートはGoogleフォームで行うが、本校独自のアンケートは紙で実施している。こどもはアンケートに最小限のことしか記入しないため、教員が詳しく聞き取り、学年でまとめてから対応を検討する。各学年で数件ずつ対応すべき案件の報告があり、全体の集約には1か月以上かかる。</p>	<p>○学校生活アンケート後の対応は、とても手間がかかるものであることを再認識した。しかし、代替手段もないと思うので、難しいと感じた。（氏家会長）</p> <p>○こどもの安全のために丁寧な情報収集をしているが、時間がかかる構造には改善の余地がある。設問の工夫やスクリーニングの軽量化、共有項目の明確化など、見直しが必要である。（大曾根委員）</p>
中学校におけるやり取り帳の活用	<p>○やり取り帳に「いじめられている」などの記載があった場合、学校内で共有し、直接本人に話を聞く。こどもたちは、悩みや困りごと以外に頑張っていることなども伝えることができ、教員との信頼関係を構築することに加え、自己肯定感を高める効果がある。明るい内容を書いていた子が急に提出しなくなったり、話題が変わったりした場合、声を掛けるきっかけになる。</p> <p>○「一言日記」という50文字程度のスペースに、こどもが感じたことを書く。担任は毎朝確認し、コメントを返信する。慣れてくるとこどもが悩みを書いてくれるため、SOSを受信するツールにもなっている。さらに、その日の気分を示す顔マークを付ける欄があり、それがきっかけで悩みを把握できた事例がある。こどもの変化を早期発見する有効な手段となっている。</p> <p>○やり取り帳は学年が上がるにつれて提出が減る。利用するかどうかはこどもに委ねられている。一方で、コメント返信に約1時間かかっているが、教育効果などを考えたとき、削るべき活動ではなく、他から時間を生み出す方がよいという結論になったが、負担軽減の方法を今後検討する必要がある。</p> <p>○毎朝全員分を回収しコメントを返すため、担任の負担となっている。授業等で時間が取れない場合もあるが、負担以上の効果が期待できるため継続している。中学校では教科担任制で生徒と接する時間が限られるため、コミュニケーション確保の手段として重要なが、負担感は課題である。</p>	<p>○やり取り帳は単なる連絡手段ではなく、こどもの変化を察知し、教員とこどもが信頼関係を築くための重要なツールだと改めて感じた。教員負担は軽くないが、こどもを支える最前線のセーフティネットであり、つながりを生み、育てる文化として継続していただきたい。（大曾根委員）</p> <p>○やり取り帳は、以前にも有効との証言があったが、教職員の負担も大きく、一般化は難しいと考える。（氏家会長）</p> <p>○一言日記は、教科担任制で担任との接点が少ない中、日常の不安や変化を可視化し、SOSをキャッチする有効な仕組みである。手書きならではの微細なサインを読み取れる点も重要である。（大曾根委員）</p> <p>○担任への依存や情報共有の個人差、業務負担の偏りなど構造的課題がある。有効性と負担のギャップをどう埋めるかが今後の課題である。（大曾根委員）</p>

	内 容	委員所感
小学校における異学年交流	<p>○本校は異学年交流を重視し、年間を通じてペア学年（1・6年、2・5年、3・4年）で総合的な学習や特別活動を行う。6年生は「1年生を一人前にする」という目標を掲げ、PDCAサイクルを取り組んでいる。活動は休み時間や交流給食など日常にも広がり、楽しく学べる工夫をしている。</p> <p>○異学年交流により、上級生や担任が下級生をよく見守り、困っている子に声を掛けやすくなるため、低学年が不満を抱えたまま帰宅することが減り、相談できる環境が整う。結果として、昨年度は低学年のいじめ件数は半減し、今年度はさらに減少しているなど、いじめ防止にも効果があると考える。</p> <p>○異学年活動では、子ども同士がSOSを出し合い、助け合う姿が見られる。その視点が児童数分あることは非常に大きな力だと感じている。</p>	<p>○こどもや地域の特性を踏まえ、異学年交流を単なる交流にとどめず、6年生にPDCAサイクルを用いて「1年生を一人前にする」目標に向けた課題設定、計画・実践・評価・振り返りを行わせている点は、優れた教育実践である。この取組は、こどもたちが今後社会生活を送るうえでの物事の捉え方や発想の道しるべとなりうるものであり、各学校で広く実施されることを望む。（村松委員）</p> <p>○総合的な学習を基盤に、育成すべき資質・能力を明確にしながら進められており、継続性も期待できる。好例として広く共有すべき取組である。また、特別活動の中で子どもの心を育てることこそ、いじめ対策の本質であり、「いじめ対策のために特別なことをする」のではなく、指導力によって日常の中で自然に心を育むことが重要である。（本岡副会長）</p>
保護者との連携	<p>○子どもの様子はアンケートや観察でも把握できるが、最も重要なのは保護者からのSOSであり、連絡があれば教頭が情報を集約し、管理職と生徒指導主任で対応方針を決定して迅速に動く。学校は、保護者に積極的に情報発信し、開かれた姿勢を示し、安心して連絡できる環境を整えている。</p> <p>○保護者対応は折り返しの電話を待つことが多く、担任が対応できない場合は教頭が引き継ぐ。保護者との電話は30分以上、聞き取りは複数人で20分ずつ、保護者への説明や指導方針の共有で数日かかることもある。途中で保護者の要求が変化することも多い。丁寧な聞き方や相づちへの配慮が不可欠である。</p>	<p>○アンケートはいじめの早期発見に不可欠であるが、表に出ない声が必ず存在するという限界もある。やり取り帳、日常の声掛け、チャンス相談、保護者との連携、教員の経験とチーム体制といった複数の気付きの回路を持つことが重要。アンケート結果そのものだけでなく、書かれなかった声や変化のサインを受けとめる姿勢も、今後ますます重要になる。（大曾根委員）</p>

	内 容	委員所感
保護者との連携	<p>○家庭環境は子どもの言動に影響し、様々な面で苦労している家庭の子どもは問題を抱えやすい傾向がある。いじめがあった場合、子どもに聞き取りを行い、保護者に連絡し事実確認を行うが、保護者が感情的になり受け止められなかったり、いじめの定義を説明しても受け入れられられなかったりすることもあり、難しさを感じる。</p> <p>○何をしても学校の先生のせいだと捉える子どもや保護者が増えており、最も大きな負担となっている。保護者の考えは子どもと同じである場合が多く、小学校からその傾向が見られる。家庭で守られること自体は良いが、子どもが自力で成長する機会を失い、外部の刺激をすべて攻撃と受け止めて過剰に防御し、そこから抜け出せなくなる子どもが存在する。</p>	<p>○保護者対応が先生方の加重な負担とならないよう組織的な工夫が必要と感じる。（村松委員）</p> <p>○保護者自身が過去にいじめの当事者だった可能性もあり、それゆえに学校のいじめ対応を軽視される恐れがあるため、保護者を巻き込んだ討論会の必要性が考えられる。（村松委員）</p> <p>○家庭が過度に守ることで子どもに他責傾向やストレス耐性の弱さが生じ、小さなトラブルでも大きな被害感となり、学校への不信や責任転嫁につながる。結果として、学校だけでは解決が難しい状況が生まれる。（大曾根委員）</p>
SNS等の使い方	<p>○SNS関連のトラブルについて、保護者が内容を把握していないことで深刻化するケースが多い。子どもが家庭で相談し、そこから学校に連絡が入り、調査を進めると複雑な背景や多くの関係者が判明する。SNS上の出来事は学級内の人間関係に影響するため、本校では長期的に丁寧な対応を続けている。</p> <p>○子どもはSNSの扱いに長けていて、教職員が知らない機能を利用することが多い。保護者が制限をかけてもほとんど効果がなく、学校でスマホの使い方を指導してほしいと求められる。スマホは今やコミュニケーションに不可欠で、持っていないといじめられる側になることもある。SNS上の問題は学校生活と密接に結びついている。</p> <p>○子どもたちが学校で乱暴な言葉を使っている場合、学年での指導や保護者への連絡を行っているが、家庭内でも同様の言葉が使われている可能性がある。子どもたちの日常で、学校生活の比重が減り、LINEやオンラインゲームなどで家に帰ってからも交流が続く現状がある。学校だけでは抱えきれず、問題が複雑化している。</p>	<p>○SNSは子どもの生活に深く組み込まれ、学校が切り離すことは不可能である。子どもは大人より早く新機能を使いこなし、学校は知識面で追いつけず、従来の情報モラル教育では限界がある。SNSトラブルで保護者が学校に指導を求める傾向が先生方の負担を増やしている。本来、SNSの使い方や危険性は家庭にも責任があり、学校だけで対応するのは限界がある。家庭・学校・社会が役割を認識し協力しなければ解決しない構造的課題である。（大曾根委員）</p> <p>○SNS上では「死ね」などの不適切な言葉を「これうますぎる、死ね」など、本来の意味でなく使われ、NGワードが日常的に刷り込まれている。SNSの影響は否定できず、この言葉遣いが広く浸透していることは事実である。（氏家会長）</p>

【学校外の関係機関（児童館など）との連携】

	内 容	委員所感
児童館との連携	<p>○年1回、児童館と新1年生の様子を共有する会を実施している。それ以外でも、市民センターや児童館へ頻繁に連絡・訪問し、情報交換を行っている。いじめに係る児童館との連携は、双方の職員が共通理解のうえ、対応できている。児童館での様子を観察することで、学校では見られない児童の姿を見ることができ、児童理解を一層深めることができた。</p> <p>○児童館で起きた問題について、必要に応じて学校が協力することもある。学校の一室を使い、話し合いを行ったケースもあった。年度初めや長期休み前に、学校と児童館が困っている子どもの情報を共有している。すべての情報を共有すると負担が大きいため、児童館のみで対応、学校と児童館が連携して対応、学校のみで対応というように場合分けを行い、対応している。</p> <p>○本校は中学校であるが、児童館等でいじめがあつた際には、すぐに学校へ連絡をもらうなど情報を密にしている。この地区的児童館では、ボランティア養成を行い、小学校卒業後も利用できるようにしてしたり、中高生向けの居場所を設けたりしているところもある。</p>	<p>○大変良好な連携であると思われる。各校で可能なものなのか、校長や学校全体の力なのか、検討したいところである。（氏家委員）</p> <p>○中学生にとっても、児童館が居場所や多様な声掛けのルートなっている、重要な地域の機関であることを再認識した。児童館に経験豊富なスタッフがいることは、いじめ防止や子どもの成長にとって重要だと改めて感じた。（本団副会長）</p> <p>○中学生が気軽に児童館に立ち寄り、ボランティアに参加したりしている姿は、学校とも家庭とも違う自然なつながりが生まれている証拠だと感じた。児童館側も「もっと中学生の力を活用したい」と前向きに考えているという話を伺い、児童館が中学生にとって「第三の居場所」としてしっかりと役割を果たしていると感じた。（大曾根委員）</p>
児童館以外の関係機関との連携	<p>○地域のスポーツ少年団との連携では、児童を見守る目を増やすことができ、いじめの未然防止と早期発見につながっている。</p> <p>○学区内にある第三の居場所としての民間施設に通っている子どもの情報交換を行うようになり、早期対応が可能となった。しかし、施設側と学校側のいじめに対する認識が違っていたことがあり、何をどこまで情報交換してよいのか課題を感じた。</p> <p>○本市の教職員は様々な取組により、いじめへの意識が高まっていると思われるが、塾やスポーツ団体などの指導者がどれだけいじめに対する意識を持っているかは分からぬ。</p> <p>○中学校では児童館との連携はほとんどない。中学生になると塾や習い事など学校外の活動は多岐にわたり、学校が全て把握するのは難しい。</p>	<p>○学校外の機関との連携をどう考えるか、貴重なヒントを頂戴した。ケースバイケースとも片付けられないし、一般論にもできないことであり、ただし学校は「こうした場にも気を配る」必要性があることは確かに思われた。（氏家委員）</p>